

「ともいき懇話会」報告①

世界のグローバル化、情報過多、価値観の多様化、少子高齢化、過疎化、そして宗教心の希薄化等々、世界や日本の変化の中で、人々は生きる指針に迷い、心の支えとなるものを求めています。

こうした現状に対して、「(公財) 浄土宗ともいき財団」では、平成 27 年春に「ともいき懇話会」を設立、宗教学者・作家・報道関係者など 8 名の有識者の方々から、今日の社会問題に対する宗教者の役割について意見・提言をお聞きしています。

本文中では、各氏の氏名は A B C で表記します。なお、文中の Y 氏は宗教学者でともいき懇話会の代表、O 師は浄土宗総合研究所研究員です。また、本文は、話し言葉を「である調」に書き換えています。(第 1 回懇話会は、会員の紹介で話し合いは行われていませんので省略します)

第 2 回「ともいき懇話会」報告書

日 時 平成 27 年 6 月 23 日 11 時～13 時

テーマ「社会は日本の仏教界をどう見ているか」

今回の懇話会のテーマは、「社会は日本の仏教界をどう見ているか」。仏教界または僧侶の「こうした点は改めてほしい」、「僧侶または教団に期待するところ」という 2 点について、会員から思うところを挙げていただきました。

A 氏 いまの世の中、信じられないような事件が多発している。それが大人の世界ばかりでなく、子供の世界にまで広がっている。これは、昔からあったこと、と済まされることではないと思う。現在は、社会的な構造変化が起きており、それにもなって世の中が乱れてきているのではないかと。

一方で、書店を見ると、宗教や心に関する本がけっこう読まれている。人々は宗教に関心が無いわけではなく、これは救いを求めているのではないかと。

宗教界はこれに答えているだろうか。ここが一つの問題だと思う。

また、今日、葬儀が簡素になってきていると思う。ひどいのは、宅配便で遺骨を寺院へ送るというものもある。一日葬というのものもある。まるで物を扱っているようだ。いろいろ事情はあると思うが、ご遺体、いや、いのちへの崇敬の思いが希薄になっているのではないかと。そして、いろいろな事情というのもの、葬儀料や戒名料など主に金銭に関わる

問題が多い。宗教者はこうしたことをもっと認識してほしい。

さきほど、現在は社会的な構造変化が起きていると言ったが、「ともいき財団」が行っている「お寺からまちおこし」の活動は、寺院と地域社会との接点をもつことで大事なことだと思う。こうした交流を通して都会に出た大人が一時的でも地元に戻り、さらに将来的に子供を連れて帰ってくるようになれば、と期待したい。

B 氏 今年の1月、弟を亡くした。彼の妻はチリの人でカトリック。葬儀は無宗教でやってほしい、火葬はしないでほしい、と。途方に暮れた。火葬はしないわけにはいかず、なんとか納得してもらったが、それ以外は、葬儀社がなんでもしてくれた。弟の妻には、葬儀は僧侶が執り行うのではなく、葬儀社が行っているものだと思われてしまった。

それから、いつまで経っても、弟を失った気持ちが癒されない。法事などがあれば、僧侶の話聞き、親類縁者が集まっているいろいろ話しなどをして、少しは癒されると思うが、それがなかった。と言って、突然ひとりで見知らぬ寺院を訪ね、ご住職と話しをするには、敷居が高い。寺院がもっと門戸を開いてほしい。

地方出身者が寺院と関わるのが、葬儀の時というのではいけないと思う。昔は、寺院は子供の遊び場にもなっていたが、いまお寺の境内で遊ぶ子供を見たことはない。お寺と地域社会との接点を増やしてほしい。

宗教に期待されていることは、心の問題など、たくさんあると思う。それらの問題に気づき、救い上げてほしい。

先日、初めて「般若心経」を写経した。お手本の文字が美しく、言葉の美しさにびっくり、驚かされた。そして、心も静まってきた。こうした寺院や仏教と接する場をもっと増やしてほしい。

C 氏 今日、文化としての仏教は以前よりも見直されていると思う。書籍などもよく売れているが、それは僧侶の法話などではなく、小説家や学者が書いたもので、見直されているものは、教養としての仏教。教団・僧侶・仏教界が見直されているかと言えば疑問がある。

宗教社会学者の友人の調査では、「仏教が好きですか」という質問をすると8~9割の人が「好き」、「お寺は？」は5~6割、「お坊さんは？」は、なんと2割。また、全国青少年教化協議会臨床仏教研究所の調査で、「宗教の役割は何ですか」という質問に対して、7割以上の人が「精神的拠り所」と答え、冠婚葬祭は3割。そして、回答者の中の団塊の世代の人に、「死に直面した時に、僧侶は支えになってくれるか」という質問には24%の人が「支えになる」と答えている。

社会の厳しい見方から言えば、今や僧侶は葬儀のスタッフでしかない、と。葬儀の

中心人物とは思われていない。

ですから、改めてほしいところは、「人の苦に寄り添った、意義のある葬儀をしない」というところ。ということは、期待するところは、これと逆、「葬儀が終わってからではなく、生きている時から、人々のさまざまな苦悩に関わってほしい」ということ。

本当の葬儀は、日本人の生き方や、心・いのちの問題を教える素晴らしいものだと思う。しかし、それが今日では、普段親しみの無いお坊さんが葬儀の時だけ車で来て、とってつけたような法話を上から目線にして、高いお布施を取っていく。皆さんそう思っている。だからイヤがられる。ゆがんだ葬儀になっているのではないか。

もう一つ改めてほしいところは、三高——敷居が高い・気位が高い・お布施が高い——ということ。これも多くの人から聞くこと。閉鎖的で檀家制度に胡坐をかき、とつきにくい。これを改めてほしい。ということは、期待するところは前と同じように、「もっと身近に接して、いろいろなことに気軽に相談にのってもらいたいことと、いのちについて解りやすく語ってほしい」ということ。

これらは主に都会でのことかもしれないが、私が東日本大震災の取材で体験した、僧侶たちが被災者の檀信徒をはじめとした人々の心やいのちの問題に積極的に関わり支えている姿。これは日頃から人々との交流があったからこそ出来ることで、これこそが宗教者の底力なのだと、強い感動を覚えたことを、ここでも強調しておきたい。

D 氏 改めてほしいところは、C さんが厳しく言われたので、私は期待するところを少々。

現在、「ともいき財団」は、「お寺からまちおこし」「心のケア」「国際支援」の3つを軸として活動していると聞いた。この中で特に「お寺からまちおこし」は「ともいき」という意味——お寺が地域との縁を結んでいく上で大事なことだと思う。特に少子化・高齢化などで独り暮らしが多くなっている中で、お寺を交流の場としていくのは、これからの社会を考える上で非常に大切なことと思う。ただ、こう言うと、この現象が地方の出来事というイメージがあるが、むしろこれからは都心部での活動が大事になってくるのではないか。

先日発表された日本創生会議の広報で、2025年には、介護問題で、全国で43万人分のベッド不足がおこる。特に首都圏でこの傾向が強く、東京・千葉・埼玉・神奈川で13万人が介護難民になると予測されている。ということは、施設に収容されないで自宅で介護をすることになる。この場合、家族のいる人でも独居の場合でも、地域の力やそこでの人間関係が重要になってくると思われる。独り暮らしの人に対する見回りなど、自発的な形での組織化が必要になるだろう。この関係を育み促す上で重要なのが寺院ではないか。心の道場として、地域のコミュニケーションの場として、寺院の役割は大きくなるのではないかと考えている。

また、この解決策として、地方への移住も提案されているが、物理的には可能でも、高齢者には慣れた地から離れるのは辛いもので、もしそういうことが実現されたとし

ても、その地方で元から住んでいる人との出会いの場をつくることなどにも寺院の役割が必要になるのではないか。

もう一つ期待したいことは、法事などが終わった時に法話をしてくれるお坊さんがいるが、これは大変よいことで、すべてのお坊さんにしてほしい。法事が終わって「では失礼」ではなく、法事の意味やお経の意味を簡単でいいから話してもらおう。これはけっこう癒しにもなる。ぜひしてほしい。

それから、教団が政治的な発言をすることはどう考えているか。いまで言えば原発とか安全保障法制。大きな教団は影響力がある。発言をすべきか、それともあくまで宗教的な範囲にしておくか。

E 氏 今回のテーマについて、会社の仲間と話したが、大部分は、これまでの皆さんの話に出てきている。この中で特に意見の多かったことは「お布施の内容が不透明」ということと、「法話する僧侶への評価が高い」ということ。

それから、いま、私が教団に期待したいことは、次の時代に対しての準備をしてほしいこと。

現在、インターネットなどコンピュータ機能の発展で、さまざまな情報を一瞬で知ることが出来るようになってきた。これは人類の進化として良いことでもあるが、一方で過度な便利さで失われていくものがたくさんあるのではないか。特に、精神的な面でいうと、我慢強さがなくなってきたのではないか、と思う。すぐに調べられ結果が解ることから、じっくり調べることが出来ず、すぐに結果を求めてしまう。これは現代人の中に顕著に表れており、新聞記者の劣化にも見える。しかし、そうかと言って、この劣化を個人の責任としてよいかどうか、私には迷いがある。

また、いままですでに始まっている将棋などに見る人工知能もこのまま発展してよいものかどうか。あらゆるものが人工知能によって為されてしまい、社会のあり方、人との繋がり、怒りや喜びなど人間の感情が溶解してしまうのではないかと心配している。心を持つ人工知能もできるようなことが言われているが、そういう時代が 20~30 年後にはくるかもしれない。そうなった時、生きている人間と人工知能との橋渡しは誰がするのか。科学者か、政治家か、宗教者か。私は宗教者であってほしい。だから教団は、いまから、その時のために準備をしてほしい。

また、いま、D さんから出た、教団が政治的な発言をすべきか否かは、私個人の思いは、すべきだと思う。難しいことではあるが、政治的なことに対しても意思表示することが、責任ある教団として必要ではないかと思う。

F 氏 年齢のせいかな、最近、私のまわりで亡くなる人が多く、半年前には母を亡くした。普段は檀家としての付き合いをあまりしていなくても、こういう時は会わねばならな

い。

A という 60 代、B という 30 代の僧侶がいて、A さんは、親族が亡くなりそうだという連絡に対して、「私でお役にたてればいいですが、そういうことが無いほうが好ましいですね」と言ってくれた。他人の死に対する気持ちへの想像力が見える。一方、B さんは、通夜・葬儀、その後の段取りばかりを言う。遺族の気持ちをまったく想っていない、と感じる。こういう人の法話など聞く気にもなれなくなってしまう。

皆さんからも言われているが、人が辛い思いをしている時、悲しんでいる時などに、なにを言ってくれるかが問題だと思う。段取りを言う前に言うことがあるのでは、と強く思った。

もう一つは、教養というか、もっといろいろな勉強をしてほしい。特に文化財や宗教の歴史など。

我々がお坊さんと接するのは、葬儀や法事以外では、祭事とか文化財を見る時で、そうした時にお坊さんから歴史的なことを交えながら話しを聞けたらと思う。仕事柄、文化的な講座やセミナーなどを取材することが多く、時々、そういう場で若いお坊さんが一生懸命勉強している姿を見る。とても好ましく感じる。もちろん仏教の専門的な知識は必要だが、こういう若いお坊さんのように専門外のものに対しても知識を多くしてほしい。そして、私たちに解りやすく伝えてほしい。葬儀の場、法事の場、また日常の場でも、そうした所で学んだ、たとえば歴史などを専門的な仏教の知識からめて話してもらえれば、すごく解りやすくなると思うし、そのお坊さんに対する親しみも湧いてくる。専門的な話を専門的に話されても、なかなか理解はできないので。

G 氏 改めてほしいことは、はぐらかさないでほしい、ということ。何をはぐらかさないでほしいかといえば、お金のこと、政治のこと。

いろいろな言い分や事情があるのは理解しているが、日本は資本主義社会で利潤を目的として社会が成り立っている。寺院やお坊さんだけが聖域であることはないと思う。私もお金まみれだが、寺院だってその運営はお金まみれではないか。そういうところを曝け出したうえで、いろいろと話しを進めていくことは、そんなに悪いことではないと思う。そうしたところをはぐらかすから、金銭面での批判や疑問が生じるのではないか。

政治のこととは、主に選挙のこと。現在の政治家が露骨に「数は力だ」という傾向が強くなっている中で、教団は票数を持っている。それを自覚しているかどうかは解らないが、記者である私などは、教団が政治的な動きをしているのではないか、なんて、下衆な勘ぐりをしてしまう。教団といたって、新聞界と同じで、リベラルから保守までいろいろあると思う。しかし、新聞界では、言論の自由とか民主主義を守ろうという理念は変わらない。これと同じように、仏教界だって基本的に仏教を広めることは一致していると思う。だから教団として声明などを出すことは賛成する。

しかし、私がいちばん言いたいのは、個々のお坊さんが選挙の時などに、こちらが質問していることに対してはぐらかさないでほしいこと。自分はこのように考えていると答えてほしい。これがないと議論が前に進まない。

期待することといえば、「でもね・・・」と、言い続けてほしい。いまの世の中、力が強く、お金を持っている者が牛耳っている側面があると思う。でも、世の中には、いつの時代でも変わりなく「善きこと」「美德」はある。それがないと人間は生きていけない。そこをお坊さんは言い続けてほしい。経済優先の話が主流になっていても、「でもね、仏教的にみれば・・・」というように、他者からみれば青臭いことでも、それを言い続けてほしい。それも解りやすく。こうしたことは新聞界にも言える事で、私は、このままいったら宗教界も新聞界も先がない、と思っている。

また、稀有壮大なことを、穏やかに、静かに語ってほしい。経典などを読むと、ものすごく宇宙的な広がり、時空を超えている世界が展開されていて、自分が考えていることなどバカくさいというか、相対化されるところがある。人はだれでも孤独を感じ、寂しく哀しくなることもあるが、そんな時、祖先が崇めているなどと言わないで、稀有壮大な話を穏やかに、そして静かに語っていただきたい。大きな癒しになると思う。

現実には、欲にまみれた人間ばかりであるが、お坊さんにはこうした人々と同じレベルで接し、しかし、それを超えた価値観を話し続けていただきたい。

A 氏 私の話は終わっていますが、一言よろしいでしょうか。

私の発言が終わってから宗教団体と政治の話が出て、教団は政治のことにもっと発言したほうがよいという発言がありましたが、私は慎重であるべきだと思います。過去の歴史をみても、宗教が国家と関わるとあまり良くないことが起きている。政治と宗教は無縁であるべきだということもありませんが、宗教はやはり鎌倉以降にでた個人の救済を中心に活動したほうが良いと思う。キリスト教世界をみても「神のものは神に、カエサルのはカエサルに」ということから近代が始まっている。

政治選択は、いろいろ複雑で、考え方もいろいろあるから、我々の代表である議員が、国会で議論を通じて政策を決めていくべきだと思います。したがって、宗教団体が態度を決めて日常的に政策に口を出すことは、慎重であるべきだと私は思う。もちろん、個々のお坊さんが自分の考えを表明することは何の問題もないことは当然です。

Y 氏 いま、皆さんから「改めてほしい点」「期待するところ」について発言をいただいた。その主なところは「僧侶の資質について」に集約されると思う。「改めてほしい点」「期待するところ」も表裏のように、「改めてほしい点」は「期待したいところ」になっている。また、教団に対するご意見では、教団と政治に関する発言があった。これは難

しい問題だと思う。

今日の、大問題としてあるのは、人口減少と少子高齢化。日本の都市はAさんが言うとおり、急速な勢いで変化している。そしてそれ以上に地方が変わっている。その中で仏教は、寺院は、という問題がある。

先般、「地方が消滅する」というデータが出された。この前提になっているのが限界集落。限界集落論というのは、1980年代に出ていて、私もずっと考えていることで、この限界集落がアツという間に危機的状態になってきた。そこに住んでいるのは限界老人、独り暮らしの老人。葬儀もままならない、お寺も機能していない。限界老人、限界集落、限界地方、そしてもう一つ、そこには限界寺院というのが重要な意味をもって介在していると思う。限界集落における限界寺院。限界老人に取り巻かれている限界寺院、僧侶。この全体像をどう捉えていくか。

最近『寺院消滅』という本が出版され、そこに、地方における寺院はいま整理統合という段階に入っている、と。そして、そういう寺院には住職がおらず、しかもそうした寺院が激増している、と。

どうしたらいいのか。

悲観的な状況であり、メディアもそう報道している。しかし、私はそこにこそ仏教界にとってのチャンスがあると思う。

なぜか。

限界集落にある限界寺院。その周辺にいる人々は、ほとんど伝統的な葬儀、仏教の考え方では救われない状態に追い込まれている。何がそう追い込んでいるか。死、そのもの。自分の死をどうするか、隣の人の死をどうするか。お坊さんはいない、寺は寺として機能していない。そうなれば、限界老人たちは、自分たちで死の処理をしなければならぬ。穴を掘る、葬儀を執行する。中世の毛坊主(*)の時代が再現し始めている。死、そのものに直面しなければならぬ状態が地方で起き、それが広がっている。そして、そこから、「あ～、やはり、死というものは宗教を必要としている」という時代にきている、と。ここがチャンスだと。

いま、我々の社会は、目には見えないが、宗教の原点に立ち戻ろうとしているのではないか。この原点に立って考えれば、問題は見えてくるのではないか。

(* 有髪で半僧半俗の人。寺のない農村などで、葬儀・年忌の際に僧の役をした)

○ 師 社会が仏教界をどう見ているか。

「組織・制度の信頼度」(JGSS・2006)を見ると、宗教団体は14.5%で最低。信頼度トップが病院、2番が新聞、宗教団体は15番目で、14番が国会議員。先ほどCさんが言われていたが、宗教や仏教に対するイメージはまだまだ捨てたものではないのに、宗教団体に対する信頼度は低い。これはオウム真理教の事件が影響していると思う。しかし、一方、神社・寺院の信頼度は「非常に信頼できる。まあまあ信頼できる」

が神社 54, 4%、寺院 68, 2%と高い。これを見ると神社や寺院は、地域の宗教的・文化的な役割を担ってきたことがうかがえる。また異なった視点では宗教施設というより文化・歴史的な場として捉えられているともいえよう。

また、「寺院を訪れた目的」（第一生命経済研究所）を見ると「お墓参り」が60%以上。これは宗教に関するあらゆる調査でも同じ回答で、増えてもいる。2年前に経済産業省が行った「安心と信頼のある「ライフエンディングステージ」の創出に向けて」という研究会が行った調査でも、やはりお墓参りが一番。これを見て行政の人が「そろそろお墓参りを宗教行事から外したほうがいいね」と言った。どういうことかというところ、これはもう日本の文化的行事だと。そして2番目が「観光・旅行」、3番目が「法事」。これを見てみるとある面イベント事で、お墓参りや法事は精神的な面で安心を得ることはできるが、教化という面からみると直接的な信仰につながるものかどうか疑問はある。

次に、「お寺はどのような活動をすべきか」（第一生命経済研究所）という問いには、「死者・先祖の供養」が80%近く。これは先ほどから皆さんが言っている「死者・先祖の供養をちゃんとやってもらいたい」と同じことだと思う。これをきちんと行うことによって、人々の心が癒され、心の平安が取り戻せる、ということ。2番目が「仏教の教えを広める活動」49%、3番目が「介護や死の看取りなど、老い・病気・死に関わる取り組み」30%。2番目も皆さまから言われたことで、3番目は、ある意味、近年になって一部の僧侶たちによって始められたことが認められてきたことと、さらにもっとしてほしいという意見と思われる。20年ほど前の調査、「死に直面したときに誰を頼りにするか」によると、配偶者、家族、友人、医療従事者、そして宗教者。看護師や医師よりずっと下になっている。

これらを通して見ると、宗教そのものに対する良いイメージ——宗教は心の支えになる——と信じていても、宗教者には頼ろうとしていないことが見えてくる。皆さんが「改めてほしい点」「期待するところ」で言われたことが、調査でも見えている。

もう一つはお金のこと。「組織区分別法人税調査の状況」（宗教関連統計に関する資料集）という文化庁の調査があるが、この中で不正発見割合で宗教法人はトップ。しかし、金額的にいえば財団・社団法人、社会福祉法人、学校法人などより非常に少ない。額の多少の問題ではないが、やはりこうしたことが、社会から見て不信感をもたられる原因になっていると思える。

いずれにしても、こうしたことを仏教界として真剣に考え、法令順守、公益法人としての役割を果たしていかなければ宗教界の先はないでしょう。

以上

- * 今回の懇話会中、D氏から浄土宗に、「教団が政治的な発言をすることはどう考えているか」という質問があり、会員からも賛否のご意見がありました。

浄土宗では、懇話会后、この発言について、「浄土宗は、これまで政治団体との繋がりや政治的発言には慎重であるべきとの態度で臨んでいます」と、答えています。